

感性と表現にかかわる保育内容において、継続的な活動の重要性を認識するカリキュラム

徳安敦⁽¹⁾、松尾麻紀⁽²⁾、砥上あゆみ⁽³⁾

The curriculum which recognizes the importance of continuous activity in childcare contents about sensitivity and expression

by

Atsushi TOKUYASU · Maki MATSUO · Ayumi TOGAMI

目次

- 1 はじめに
- 2 研究の目的と方法
 - 2-1 目的
 - 2-2 方法
- 3 総合的・発展的・継続的な保育について
 - 3-1 総合的保育
 - 3-2 発展的保育
 - 3-3 継続的（積み上げの）保育
- 4 保育の継続性の意義について理解するための学習カリキュラム
 - 4-1 カリキュラムの内容と流れ
 - 4-2 各取り組みに対する受講生の視点
- 5 学習カリキュラムの効果
 - 5-1 カリキュラムによる効果の全体的検証（データの分析）
 - 5-1-1 データ
 - 5-1-2 仮説
 - 5-1-3 検定
 - 5-1-4 結果
 - 5-2 カリキュラムによる効果の個別的検証（記述内容の分析）
 - 5-2-1 個人データおよび分析
 - 5-2-2 考察
- 6 まとめ

受理日 平成 23 年 11 月 24 日

(1) 純真短期大学こども学科 教授

(2) 純真短期大学こども学科 講師

(3) 純真短期大学こども学科 助手

1 はじめに

相手の立場でものを感じ、考えることができるような豊かな人間性を育むためにも、豊かな感性と表現力を育てる保育が強く求められるところである。特に表面にあるものを、五感を通して感じるだけでなく、その奥にあるものをも感じ取ることができるような、超感覚的感性あるいは超感覚的認識力の育成が保育に求められる。

奥にあるものとは、時には直接的には見ることのできない人の感情や思考であり、また時には直接見ることのできない自然や地球・宇宙のシステムである。

これらのための有効な保育内容の一つとして、メルヘン（童話）を中心においた活動がある。「人間性に関わる内面的目的を内包し、魂をゆさぶり心の奥に語りかけてくる作品、イメージが湧きやすく、律動的動きに結びつき表現意欲をかきたてるような作品」⁽¹⁾を題材として、劇遊びなどへ結び付けていく活動である。

このような活動の中には、長期的な活動をすることにより、一層効果をあげる場合がある。ところが保育を学ぶ学生が、一般的な実習期間では、メルヘンを中心にした継続的で総合的な長期にわたる保育を体験的に学習することは困難である。

従って今回は、このような長期の「継続的（積み上げの）」な保育の展開を、授業の中で学生が、体験的に理解するための学習カリキュラムを提示するとともに、その効果について検証する。

2 研究の目的と方法

2-1 目的

保育の継続性の意義や方法の理解とともに、楽しさを感じる保育方法の理解を目的として、同じ童話を使い、異なった方法で表現活動をすることが、保育者を目指す学生にとって、保育の継続性を理解する学習機会となりえるかについて、学生の感想を通して考察する。

2-2 方法

総合的・発展的・継続的という言葉は、保育を考える中でよく使われる言葉であり、望ましい保育を考える際の鍵となる言葉でもある。従って、最初にその語義について整理を行なう。

次に、保育者を養成する機関で、保育の継続性を体験的に学習するためのカリキュラムについて、実施した内容や構成を基に提示する。

最後に、この授業が、「保育者を目指す学生にとって、保育の継続性の意義について理解する学習機会」となったか否かについて、受講学生へのアンケートを通して検証する。アンケートは最終講義時に実施したものである。

アンケート質問項目：6項目、自由記述

①同じ題材（童話）で、「読み聞かせ」「テーブル人形劇」「劇遊び」という異なった表現活動に取り組むということを知り、どう思いましたか。

②テーブル人形劇に取り組んでみて、感じたことや考えたことを教えてください。

- ③テーブル人形劇を子ども達がいつでも遊べるように置いておくことについて、どう思いますか。
- ④子どもが参加する劇遊びについてどう思いましたか。
- ⑤一つの題材（お話）で、つながりのある発展的な保育を行うことについてどう思いますか。
- ⑥今回の取り組みで、他に感じたことや考えたことがあれば教えてください。

質問項目のうち①の「同じ題材（童話）で、『読み聞かせ』『テーブル人形劇』『劇遊び』という異なった表現活動に取り組むということを知り、どう思いましたか。」という取り組みの初期における捉え方と、質問項目⑤の「一つの題材（お話）で、つながりのある発展的な保育を行うことについてどう思いますか。」という受講後の捉え方を比較することにより、このカリキュラムの有効性について検証する。

さらに、個々の学生の中でどのような気付きや変化があったのかについて、アンケートの記述内容を分析する。

3 総合的・発展的・継続的な保育について

保育関係のキーワードとして、「総合的」「発展的」「継続的」が使われることがある。はじめに、このことの意味を明らかにするために、一般的に取り組まれていると考えられるこれらの内容について整理を行う。

3-1 総合的保育

保育における教育内容については、子どもの発達の特徴から五つの領域に分類されているが、その内容は相互に関連しながら、総合的に展開されるものである。この「総合的」を学生が理解するために、保育士養成機関で行われている方法としては、主に二つの方法がとられている。一つは、子ども（達）の姿をイメージすることができる事例資料と園における保育の課程や保育の計画などを基に、子どもの姿から五領域にわたるねらいや内容を総合した活動の設定を考えていく方法。もう一つは、子ども達が活動している様子を直接又は間接的に観察することを通して、その活動が五つの領域に関わっていることを学習していく方法である。これらは、「領域が相互に関わりながら総合的に」あるいは「総合的な遊びを通して」の理解を図る方法である。

3-2 発展的保育

「発展的」を体験的に学習する方法としては、一つの活動又はテーマから派生する活動を考え計画を立てる。あるいは模擬的に実践する方法がある。この場合、保育所保育指針や幼稚園教育要領に示されている五領域とは別に、「保育の表現技術」に連なる、音楽表現、身体表現、言語表現、造形表現などのような多方面の活動領域にわたって発展的に活動が展開されることを求められる場合が多い。

テーマが「花」の場合、これから派生する活動として、花に関する絵本や紙芝居を読む、花に関する歌を歌いまた演奏をする、花が出てくるリズム遊びやダンスをする、折り紙で花を折る、花の絵を描くなどの計画の立案や模擬保育の実践によって、中心的なテーマか

ら活動が発展的に広がっていくことを体験的に学習している。

しかしこの場合、それぞれの活動にテーマ「花」以外の関連性や連続性が乏しく、活動が羅列的で細切れになる場合がある。

3-3 継続的（積み上げの）保育

広がりの中心に、詩意詩情やメルヘン（童話）があると、活動が発展的に広がるとともに、相互に活動やテーマが強化されるという面が生じる。ねらいのために積み上げられていく活動となっていく。

たとえば短期の活動であっても、「あめふりくまのこ」の歌唱をする前の活動として、雨や熊や魚や小川に関する絵本・紙芝居を読むことによって、より興味や関心をもってこの曲に取り組めるようにする。（もちろん直接的経験が好ましい）またそのことによって曲の詩意詩情の理解を図ろうとする。曲のイメージを絵に描く。曲のリズムや曲想に合わせて身体活動をする。ペープサートやパネルシアターを作り演じる。室内装飾などの環境構成を行う。くり返し歌い演奏する。などのように、その中に有機的な意図のある継続性と総合性を持つことにより、より深く子どもの心に響く活動となることが期待される。

計画された内容を細切れに消化していく保育では時として「仏作って魂を入れず」ということになってしまう。つまり、「靈感、現代で言うインスピレーションに魂が宿るか否かが、諸芸術、そして音楽教育の行方を指し示している」⁽²⁾ということになる。

このため、園によっては一つのメルヘン（童話）を使い、1年間あるいは半年間という長い期間にわたって保育を展開しているところもある。子どもたちとともに作る園やクラスの環境づくりやごっこ遊び、運動会や生活発表会、音楽発表会などの園行事もこのメルヘンのイメージに触発されて継続されていく。

4 保育の継続性の意義について理解するための学習カリキュラム

大学の講義の中で、園と同じような継続的体験自体をすることはなかなかできない。そこで、このような長期の「継続的（積み上げの）」な保育の展開を体験的に学習することに繋がるとと思われる学習カリキュラムについて検証する。

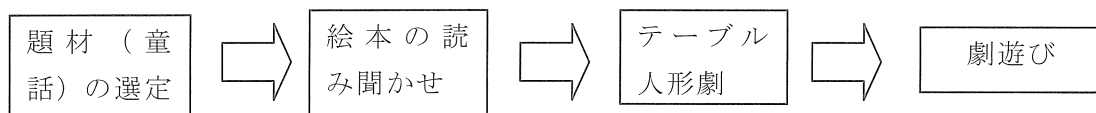
4-1 カリキュラムの内容と流れ

この学習は、言語表現に関する時間 15 コマのうち、7 コマを使って行なった。

- ① 細切れの保育ではなく、流れのある保育について説明をする。
- ② 保育者が子ども達にイメージを投げかけながら進める劇遊びの方法について説明をする。
- ③ テーブル人形劇の作成方法や進めかたについて説明をする。（劇発表後、保育室のコーナーに置いて、子どもたちが自由に遊べる環境づくりをする。）
- ④ 5～6人でグループ編成を行い、劇遊びやテーブル人形劇の活動をするのに適していると思われる題材の絵本を選ぶ。
- ⑤ 絵本の読み聞かせを行うための、場面分析と読み聞かせの演出ノートを作成する。
- ⑥ グループで絵本の読み聞かせの練習と発表を行う。
- ⑦ グループで絵本の題材と同じ題材のテーブル人形劇の人形等の製作と台本の作成を行

う。

- ⑧ グループでテーブル人形劇の練習を行い、クラスの学生を対象に模擬保育を行う。
- ⑨ グループで絵本の題材と同じ題材の劇遊びの展開を考える。
- ⑩ グループで劇遊びの練習を行い、クラスの学生を対象に模擬保育を行う。

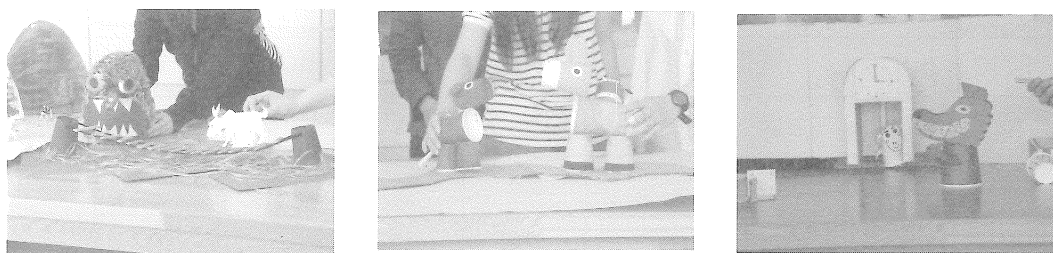


4-2 各取り組みに対する受講生の視点

取り組みの過程に対する受講生の視点を理解するために、「テーブル人形劇の製作と発表」「テーブル人形のコーナーへの設置」「劇遊び」について、アンケートの記述内容を取り上げ、それぞれの過程に対する感想をまとめる。

(1) テーブル人形劇の感想

テーブル人形劇という、置き人形による立体的な人形劇を作成することが、初めてという学生が多かったためか、「作る段階から楽しかった」など作成者の立場からの感想が多く見られた。テーブル人形劇をする場合の演者が立つ位置や人形の動かし方など演じ方に関する感想も多かった。そのなかで、「絵本の読み聞かせよりも、伝えやすかった」「お話のイメージが広がって子どもたちに伝わりやすくなる」など絵本読みとの比較による感想もあった。



(学生が作成したテーブル人形)

(2) テーブル人形をコーナーへ設置することに関する感想

「空想の世界の中で実際に人形を動かしながら、演じて遊べるのが楽しい。」「実際に遊ぶと想像力が育つ」「物語をより深く理解することができる」「子ども達のイメージが広がり人形づくりなどさらに発展しそうだ」などの感想があった。流れのある保育の意義につながる感想が多く見られた。

(3) 劇遊びの感想

「子どもが楽しめる」「想像力が豊かに膨らむ」「役になることにより物語を良く知ることができる」「絵本やテーブル人形劇のせりふなどが自然に出てきた」「話を思い出して、なりきって遊ぶことができている」などの感想があった。保育者が物語のイメージを投

げかけ、そこへ子どもが参加し、役になりきって遊ぶことの楽しさと意義を感じさせる感想が多く見られた

5 学習カリキュラムの効果

5-1 カリキュラムによる効果の全体的検証（データの分析）

5-1-1 データ

- ・アンケート対象：F市J短期大学 2年生
- ・アンケート回答人数：53人
- ・アンケート実施時期：2011年8月（最終授業）
- ・学習カリキュラム実施時期：2011年4月～6月

効果の全体的検証においては質問①と質問⑤における学生のとらえ方の違いについて、学習カリキュラム実施前に関する質問事項①と学習カリキュラム実施後の質問事項である⑤の質問内容が近似的であるという立場に立って検証する。

（1）質問事項①と質問事項⑤に関するデータ

A：イメージの広がりや深まりの効果、変化や継続の楽しさなどに言及していると考えられるもの。

B：A以外のもの。（ただし、質問事項①の回答において、事後の感想としてAの内容が記述されているものはBとした。）

なお、A Bの評価にあたっては、3人の評価者のうち2人以上の評価をもって決定した。

番号	質問事項①		質問事項⑤		番号	質問事項①		質問事項⑤	
	A	B	A	B		A	B	A	B
1		○	○		28		○	○	
2		○		○	29	○		○	
3		○	○		30		○	○	
4		○	○		31		○		○
5		○	○		32		○		○
6		○	○		33		○	○	
7		○	○		34	○		○	
8	○		○		35		○	○	
9		○	○		36		○	○	
10	○		○		37		○	○	
11		○	○		38	○		○	

12		○	○		39		○	○	
13	○		○		40		○	○	
14		○	○		41		○	○	
15		○	○		42	○		○	
16		○	○		43		○	○	
17		○	○		44		○	○	
18		○	○		45	○		○	
19	○		○		46		○	○	
20		○	○		47		○	○	
21	○		○		48		○		○
22		○	○		49		○		○
23	○		○		50		○	○	
24		○	○		51	○		○	
25		○	○		52		○	○	
26		○	○		53		○	○	
27	○		○		合計	13	40	48	5

(2) 質問事項①と⑤の間におけるA Bの変化

変化 (①⇒⑤)	人 数	(%)
A ⇒ A	13	24.5
A ⇒ B	0	0.0
B ⇒ A	35	66.0
B ⇒ B	5	9.5

学習カリキュラム実施前に関する質問事項①の回答内容がA（イメージの広がりや深まりの効果、変化や継続の楽しさなどに言及していると考えられるもの）だったものが、学習カリキュラム実施後に関する質問事項⑤でもAだったものは13人で、全体の24.5%であった。

学習カリキュラム実施前に関する質問事項①の回答内容がB（A以外の回答）だったものが、学習カリキュラム実施後に関する質問事項⑤でAに変化したものは35人で全体の66%であった。

学習カリキュラム実施前に関する質問事項①の回答内容がB（A以外の回答）だったものが、学習カリキュラム実施後に関する質問事項⑤でBのままだったものは5人で全体の9.5%であった。

この結果、学習カリキュラム実施後に関する質問事項では48人（90.5%）がイメージの広がりや深まりの効果、変化や継続の楽しさなどに言及していた。

（3）学習カリキュラムの実施と回答内容のクロス表

度数

	学習カリキュラム実施前に関する質問事項①	学習カリキュラム実施後の質問事項である⑤	合計
A	13	40	53
B	48	5	53
合計	61	45	106

5-1-2 仮説

学習カリキュラム実施前に関する質問事項①と学習カリキュラム実施後の質問事項である⑤の回答において、イメージの連続、広がり、深まり、変化や継続の楽しさに言及している人数に差があるが、これは短期大学生に対して学習プログラムを実施したことによる差といえるか。

5-1-3 検定

（1）帰無仮説、対立仮説の設定

- ・帰無仮説 H_0 : アンケート①と⑤の回答がAだった人の差は、学習カリキュラム実施による差だとは言えない。
- ・対立仮説 H_1 : アンケート①と⑤の回答がAだった人の差は、学習カリキュラム実施による差だと言える。

（2）検定法の選択

- ・検定法の選択: Fisherの直接法

（3）直接確率検定の結果

- ・ $P = 1.27897E-12$
- ・ $P < 0.0001$

（4）仮説の棄却・採択の判定

- ・判定: 有意確率 $P = .000 (***)$ なので帰無仮説を棄却し、対立仮説を採択する。

5-1-4 結果

学習カリキュラム実施前の質問①と学習カリキュラム実施後の質問事項である⑤の回答において、イメージの連続、広がり、深まり、変化や継続の楽しさに言及している人数に差があるが、これは検定の結果、有意な差であるため、短期大学生に対して学習プログラムを実施したことによる差だと言える。

5-2 カリキュラムによる効果の個別的検証（記述内容の分析）

個人の中でどのような気づきや変化があったのかを、個々のアンケート①～⑤の記述を通して検証する。その際の視点としては、次の2点を設ける。

- a 継続・変化による楽しさ
- b イメージのつながり、発展、深まりの効果

5-2-1 個人データおよび分析

(1) S.A

項目	記述内容	視点
①	テーブル人形は想像できなかったので、大変そうだなと思いました。	
②	どの角度から子どもがみるか、子どもが自分たちでする場合使いやすいかなど、いろいろな面で人形を作るのは難しいなと思いました。	
③	自分達で思い出したり考えたり、想像したりできるので、とてもいいと思います。	b
④	先生がまとめていくことで、子どももなりきれるので、楽しいなと思いました。	
⑤	一つの物語から、いろいろなパターンでできるので、すごくいいなと思いました。いろいろあるからこそ、子どもも一緒にできて楽しいと思います。	a b

①、②では、テーブル人形劇に取り組むこと自体が初めての経験であるということもあり、イメージが湧かずに不安も感じられるが、②の中では、子ども達の視点から課題を見いだしている。③では、「思い出したり」「想像したり」という表現の中に、イメージのつながり、発展、深まりの効果という視点を見ることが出来る。⑤では、「一つの物語から、いろいろなパターンでできる」「いろいろあるからこそ・・・楽しいと思います」と継続や変化による楽しさの視点が見られる。

(2) Y.I

項目	記述内容	視点
①	テーブル人形劇、劇遊びというものが、いまひとつ想像できなかった。	
②	紙コップのみで人や動物を表現することの楽しさを体験できました。	
③	子どもたちは想像力が豊かであるし、さらに豊かにするきっかけとして置いておくことは良いと思います。	b

④	一方的に見せる劇とは違い、子ども自身が物語の世界に入り込める楽しさがあるので、とても面白みを感じました。	
⑤	平面（絵本）から立体（テーブル人形劇）、実物大（劇遊び）へと世界が広がっていく流れは、大人でも十分楽しく感じ、子どもは更に楽しめると思います。	a

①では、これからする活動がイメージできていなかったようだが、②ではテーブル人形劇の製作に楽しさを感じ、③ではコーナーにテーブル人形を置くことにより、子どもたちの想像力をさらに豊かにすると考えている。④では劇遊びの面白みを感じるとともに、⑤では、一連の流れに対して「子どもは更に楽しめる」と考えている。

(3) M.0

項目	記 述 内 容	視点
①	全くイメージができず、不安で、何から始めたら良いのか分からなかった。	
②	登場する人物や動物だけ作るのではなく、背景なども作ることで、よりリアリティがでて、場面毎の展開がしやすく、人形を動かしている私達にとっても楽しく取り組むことができた。	
③	一度保育者が行なったストーリーを、子どもたちの遊びの中に取り入れることで、よりストーリーの中に入り込むことができ、お話に親しみを持ち、子ども同士のコミュニケーションにもつながると思う。	a b
④	子ども一人一人が役になりきり、保育者の声掛けからさまざまな表現を想像し、演じることができ、子どもたちの新たな一面を見ることのできる遊びだと思う。	
⑤	一つのテーマにそって遊びを発展させていくことで、子ども達も少しずつストーリーを理解し、子ども自ら次々に場面を展開していくことができ、子どもの想像力を養う遊びだと感じた。	b

①では、「読み聞かせ」は経験したことがあるが、他の活動に対してはイメージができていないため不安がある。継続的な保育経験がなかったと考えられる。②では、テーブル人形劇の特性にふれ楽しさを感じている。

③の「よりストーリーの中に入り込むことができ」、④の「さまざまな表現を想像し、演じることができ」、⑤の「子ども自ら次々に場面を展開していくことができ」という表現から、子どもがストーリーの中に入り、想像を広げ、想像の世界に入り、展開していく姿をイメージすることができている。

また③の「子ども同士のコミュニケーションにもつながる」、④の「子どもの新たな一面を見ることのできる遊び」、⑤の「子どもの想像力を養う遊び」という表現から、絵本、テーブル人形、劇遊びの活動と子どもの成長を結びつけてとらえている。

(4) S.S

項目	記述内容	視点
①	同じ話だと、ストーリー性もあるし、流れをつかむのにもあまり時間がかからないと思うのでいいと思った。	b
②	テーブル人形劇に初めて触れて、このようなやり方もあるのだと感じた。子どもがいろいろな角度から立体的に見ることができるので、いいと思った。	
③	子ども達が自らセリフなど考えて遊ぶことができるのでいいと思った。人形の動かし方やタイミングなども自ら考えることになると思うので、子どもたちは自ら考え行動する力を身につけることができると思う。	b
④	子どもたちは絵本やテーブル人形劇を通して、話の内容を知っているので、自らセリフを言ったり、自然と言葉が出てきたりと、とてもいいと思った。道具があるわけではないが、そこに何かがあるように想像しながら劇を進めることができたというのが良かったと思う。	b
⑤	つながりのある保育はいいと思った。子どもたちも自ら物語に合わせて動いたりしていて、なりきることができると思う。読み聞かせから段々と発展していくことによって、子どもたちもイメージしやすいと思うし、より話に入り込むことができるのではないかと思う。	b

①の記述内容から流れある保育の想像がある程度できているようだ。②では、絵本がテーブル人形という立体的なものに変化したこと、③では、実際にテーブル人形で子どもが遊ぶことにより、自ら考え行動する力を身につけることにつながると考えている。

④の「絵本やテーブル人形劇を通して・・・自然と言葉が出てきたり」「想像しながら劇を進めることができた」という表現、⑤の「読み聞かせから段々と発展していくこと」から、イメージのつながり、発展、深まりの効果の視点を感じることができる。

(5) A.H

項目	記述内容	視点
①	三つともに対応できるような絵本選びをしなければむずかしいと思いました。	
②	どの人形を作るか、どの場面をどう紙コップで作るか悩みましたが、うまく工夫して人形が作れてとても充実した内容になったと思います。	
③	賛成です。先生がしていることをまねしたがるし、子ども達がいつでも遊べるようにすることで、絵本をより深く理解することができると思うからです。	b
④	子どもたちとイメージを共有することで、物語がもっと楽しく、そして登場人物の気持ちになれると思いました。	a b
⑤	一冊の絵本をただ読み聞かせするだけでなく、発展させることで、その絵本の伝えたいことが子どもたちに伝えやすくなり、そして、伝わりやす	b

	くなると思います。	
--	-----------	--

①の記述内容から流れある活動を念頭においていることがわかる。②では、絵本の内容をテーブル人形で表現することへの工夫がみられ、③の「絵本をより深く理解することができる」という表現から、継続、変化により、イメージのつながり、発展深まりの効果を感じているように思われる。

同様に④の「イメージの共有」という表現、⑤の「発展させることで…子どもたちに伝わりやすくなる」という表現からも、一つの題材で絵本、テーブル人形劇を通して、イメージを強化したことで劇遊びでのイメージの共有につながり、発展させることで子どものイメージが深まると考えている。

(6) R.H

項目	記述内容	視点
①	あまりイメージが湧かなかったので、どういうものか分かりませんでした。でも、とりあえず流れのある保育ということで、遊びをどんどん発展させていくということが難しそうだと思います	b
②	準備が思ったより大変だった。登場人物が多いお話などは、たくさん作らないといけないので難しいなと思った。	
③	とても良いと思う。子どもたちが自ら新しい登場人物を紙コップで作ったり、背景など小道具を作ったりして、発展していきそうだと思います。	b
④	子どもはとても楽しいだろうし、イメージが膨らんでよいと思う。	a b
⑤	一つのお話だけで、いろいろな保育ができるので、子どもたちもあきずに楽しめると思いました。また、知らないお話でも繰り返し繰り返しの遊びで、イメージ豊かに積極的にみんなが遊べると思います。	a b

①では、イメージが湧かないが、「遊びをどんどん発展させていくということ」という表現から絵本読み、テーブル人形、劇遊びが途切れず、つながっていかねばならないことを理解していると捉えることができる。

②では、テーブル人形の製作、表現の変化への難しさを感じ、③では、子ども達が遊びを発展させていくことが予想され、継続、変化の楽しさへの期待が伺える。

④では、「イメージが膨らんでよい」という表現から絵本読み、テーブル人形劇が劇遊びのイメージにつながっていることから、イメージのつながり、発展、深まりの効果を感ずることができる。⑤では「あきずに楽しめる」「繰り返し繰り返しの遊び」という表現から、継続、変化の楽しさの視点を見ることができる。

また「積極的に」という言葉から子どもの主体的活動をイメージしていると思われる。

(7) A.Y

項目	記述内容	視点
①	楽しそうのでやってみたくてと思いました。	

②	絵本から実際に形にすることは難しかったけど、皆で意見を出しあって、作り出すことは楽しかったです。	
③	良いと思います。大好きな絵本のキャラクターと実際に遊べることは子どもたちに絵本の楽しさなどをより伝えられると思います。	a b
④	目の前で起きている劇に、自分が参加できることはとても嬉しいと思います。演じたりすることで考えたりすることができるので想像力豊かになると思います。	
⑤	そのお話が大好きになって、その絵本の主旨とかが体とかで感じる事ができて、子どもたちにとって忘れられないお話になると思います。	a b

①では、「楽しそう」という表現から、これからする活動を想像することができていることが考えられ、②では、テーブル人形劇のグループ製作自体に楽しさを感じている。③では、「実際に遊べること」の表現から絵本のキャラクターがテーブル人形劇に変化して遊びにつながっていることが分かり、そこに継続、変化による楽しさの視点を見ることが出来る。また「絵本の楽しさをより伝えられる」という表現からイメージのつながり、発展、深まりの効果を感じている。

④、⑤では、「忘れられないお話になる」という表現から一つの題材が基になり、継続、変化による楽しさを感じることができたと考えられる。子どもが劇に参加できることにより、絵本、テーブル人形劇を通してメルヘンの世界を想像できており、イメージのつながり、発展、深まりの効果があると考えている。

5-2-2 考察

活動初期の感想には、「テーブル人形は想像できなかった」「不安で、何から始めたら良いのか分からなかった」「あまりイメージが湧かなかった」「むずかしいと思いました」「楽しそうやってみたい」などが中心的なものであった。「同じ話だと、ストーリー性もあるし、流れをつかむのにもあまり時間がかからない」「流れのある保育ということで、遊びをどんどん発展させていくということが難しそう」などのように、流れのある保育の意義から言及したものもあるが、数は少なかった。

しかし、学習カリキュラムにそった活動を体験的に重ねていくことにより、「自分達で思い出したり考えたり、想像したりできる」「一つの物語から、いろいろなパターンでできる」「平面（絵本）から立体（テーブル人形劇）、実物大（劇遊び）へと世界が広がっていく流れ」「一度保育者が行なったストーリーを、子どもたちの遊びの中に取り入れる」「一つのテーマにそって遊びを発展させ・・・少しずつストーリーを理解し・・・自ら次々に場面を展開していく」「絵本やテーブル人形劇を通して、話の内容を知っているので、自らセリフを言ったり、自然と言葉が出てきたり」「イメージを共有することで、物語がもっと楽しく、そして登場人物の気持になれる」「一つのお話だけで、いろいろな保育ができるので、子どもたちもあきずに楽しめる」「絵本の楽しさなどをより伝えられる」「そのお話が大好きになって、その絵本の主旨とかが体とかで感じる事ができ・・・忘れられないお話になる」など、aの継続・変化による楽しさ、bのイメージのつながり、発展、深まりの

効果などから言及する感想が多くなった。

このことから、今回の学習カリキュラムは、流れのある保育の意義を感じとる一つの機会を、学生に提供できたと考える。

6 まとめ

一つの話を中心に、つながりのある発展的な保育について体験的に理解するための学習カリキュラムを、感性と表現に関わりの深い「絵本の読み聞かせ」「テーブル人形劇」「劇あそび」という実践（模擬保育）を通して行なった。

初期の段階では継続的（積み上げの）保育の意義を感じているものは少なかったが、回を重ねるごとにその意義を感じている学生が増え、最後の感想においては9割の学生がその意義を感じることができていた。

今後は、この経験を保育の実践場面で活用することが望まれる。日常保育の中で、種々の活動がつながりを持ち、発展的に継続していくことを意識しながら、子どもの姿と計画とをすり合わせていくことが求められる。生き生きとした活動とそのための準備に対して、ワクワクするようなイメージを持った取り組みが期待される。

引用文献

- (1) 徳安敦、「劇遊びの素材に関する研究」第一保育短期大学研究紀要 1990
- (2) 松尾麻紀、「ミューズ、その呼び起こされるもの—プラトンに見る音楽教育の視座—」純真紀要第51号 2010